



筑摩世界文學大系

42

トルストイ

II

中村 融 訳



戦争と平和（上）

筑摩書房

筑摩世界文學大系 42

昭和四十七年七月五日

初版第一刷発行

トルストイ II

訳者 中村融

発行者 井上達三

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―九一

電話東京(二九)七六五一

振替口座東京四一二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20642 (出版社) 4604

目次

戦争と平和

中村融訳

第一編

5

第二編

226

『戦争と平和』についての数言

中村トリス
ト融訳

479

トルストイ
Ⅱ

戦争と平和

第一編

第一部

——へそれごらんなさいませ、公爵。ジェノアもルツカもポナバルト一門の領地同様になつてしまいましたわ。わたくし先に申し上げておきますけれど、これでもまだあなたが戦争なんかしないとおっしゃったり、あの反クリストの（ほんとにわたくし、あれは反クリストだと信じております）いやらしい、恐ろしいやり口を弁護でもなさるおつもりでしたら、——あなたという方はもう赤の他人ですわ、わたくしのお友達でもなければ、いつものお口ぐせのような、わたくしの忠実な奴隷でもございませぬ。で

も、まあ、よくいらして下さいましたこと。へわたくし、あなたをびっくりおさせしたようですわね、どうぞお掛けになって、お話し下さいませ。

それは一八〇五年七月のこと、話していた当人は、皇太后マリヤ・フォードロワナ側近の女官として知られたアンナ・パーヴロワナ・シエーレルで、折から彼女の夜会にいち早くやって来た、今をときめく大官のワシーリイ公爵を出迎えたところだった。アンナ・パーヴロワナは幾日か咳がつづいていて、当人の言うところによるとインフルエンザにかかっていた（インフルエンザというのは当時の新しい言葉で、少数の人しか使っていなかった）。今朝、赤い服の侍僕によって諸所へ届けられた書面には、いずれも一様に次のようにしたためられてあった。

（伯爵（公爵）さま、もしも幸いによきお出向き先もなく、哀れなる病人のもとにて一夕をおすごし下さることにさして辟易あそばされぬようでございましたら、本夕、七時より十時までご光来待ち上げます。アンナ・シエーレル）

——へほほう、これはまた猛攻撃ですな！と、そのくせこんな出会いにいささかたじろく色もなく、入って来た公爵は答えた。金モールの宮中服に長靴下、短靴、数々の勲章、のっぺりした顔の表情も明るく輝いている。彼はわれわれの祖父たちが話すばかりか、考えるときにも用いたという優雅なフランス語で話し、しかも、その物静かな、底うような音調

は社交界や宮中で多年、甲羅をへた知名の士に特有のものだった。彼はアンナ・パーヴロワナのほうに進み出ると、香水の匂うてかてかの禿げ頭を眼の前に突き出して、彼女の手に接吻すると、ゆっくりとソファに腰をかけた。

——へなによりも伺いたいが、おからだのほうはいかがですか？ どうも気がかりですな、——と彼は言ったものの、声も調子も変えず、そこには礼儀と同情の奥から冷淡さや嘲笑までが透けて見えた。

——よろしいはずはございませぬわ……心が痛んでおりますもの。当節は感情のある人でしたら、とても平気ではいられませぬわ、——とアンナ・パーヴロワナは言った、——今晚はずつと宅でおすごし下さいますのでしようね？

——じゃ、イギリス公使の祝宴はどうしろとおっしゃるのです？ 今日水曜ですからな。あすこは顔を出さないわけにはいかない、——と公爵は言った、——娘があとからお寄りして、わたしを拾っていつてくれることになっていきますので。

——今日のお祝いは取りやめになったと思っておりますわ。へまったくのところ、あんなお祭り騒ぎや火花は閉口ですものね。

——それがあなたのお望みだと分つていれば、お祭りも沙汰やみになったでしょうにね——と公爵はねじをまかれた時計のような言い方をした、それは自分で信じてもらいたくないことを口にする時の彼のくせだった。

——へそうおいじめにならないで下さいませ。

それより、ノヴォシリーツォフの至急公報の件はどうきまりましたでしょうか？ あなたならなんでもご存じですか。

——なんと申しますか？——と公爵は、冷淡な、退屈しきった調子で言った、——へどうきまったか、というのですか？ ボナバルトは背水の陣を構えたから、われわれのほうもその覚悟をしなくてはなるまい、というふうにきまつたわけですよ。

ワシリーイ公爵はいつも、役者が古い脚本のせりふを言う時のように、なげやりな口のきき方をした。アンナ・パーヴロヴナ・シエーレルのほうは、それは逆に、四十だというのに、活気と情熱にそれこそ満ち満ちていた。

情熱家であることが彼女の社会的地位になっていた、だから自分では望まない時でも、自分を知る人々の期待を裏切らないために情熱家になることもあった。アンナ・パーヴロヴナの顔にたえずちらついている遠慮がちな微笑はその老けた容貌には似つかわしくはなかったが、ちょうど甘やかされた子供のの場合のように、進んで改めようともせず、またできもせず、その必要もないと思っている自分の愛すべき欠点を片時も忘れずにいることを表わしていた。

政治活動の話の途中で、アンナ・パーヴロヴナは思わず熱してしまった。

——まあ、オーストリアのことはもうわたくしにはおっしゃらないで下さいまし！ どうせわたくしにはなにも分らないのかもしれないけれど、でも、オーストリアは以前も今も戦争

を望んだことなどは一度もありません。あの国はわたくしたちを裏切っているのです。ロシアだけはヨーロッパの救い主でなければなりません。わたくしどもの陛下はご自分の高い天職をわきまえていらつしやいますから、きつとそれを忠実にお守りになると思います。これだけはわたくしも信じております。わたくしどもの仁慈無比な陛下の前途には世界じゅうで一番偉大な役割が控えているわけですから、あのようなご高邁な、ご立派な方のことですから、神さまもお見捨てになるはずありません。今はこの人殺しという悪者になり代っていつそう恐ろしく見える革命の大蛇を退治するというご使命をお果しになると思いますわ。わたくしどもだけは正しい者の血をつぐなわなければなりません。わたくしたちはいったい、だれに期待をかけたらよろしいのでしょうか？ おたすねいたしたいものですわ……あの商人根性のイギリスはアレクサンドル陛下の気高いお心は分りますまいし、分るはずもございません。イギリスはマルタ島の撤兵を拒みましたね。これはわがほうの行動の手のうちを見ようと探りを入れていのですわ。彼らはノヴォシリーツォフになにか申しましたでしょうか？……なに一つ申しません。ご自身のためにはなに一つお望みにならずに、ひたすら世界の幸福だけを希っていらつしやるわたくしどもの陛下の犠牲的なお心など分らなかつたのですし、分るはずもございません。で、なにを約束いたしましたか？ なんにもですわ。たとえ約束したところで、な

に果すものですか！ 現にプロシヤはもう、ボナバルトを征服することはできないとか、ヨーロッパじゅうが総がかりでも立ち向かえないとか宣言いたしましたわね……でも、わたくしはハンデンベルグやガウグヴィツ(共にプロシヤの政治家)の言葉などひとつとも信じてはおけません。へあんな評判ばかりの、プロシヤの中立など——おとし穴にすぎません。わたくししの信じておりますのは、ただ神さまと、わたくしどもの親愛なる陛下の気高いご運命だけでございます。陛下はかならずヨーロッパをお救いになりますわ……！——彼女はおのれの熱中ぶりをあざ笑って不意にやめてしまった。

——わたしの考えではですわね——と公爵はにっこり笑いながら言った、——こりや、もしもあの愛すべきウインツェングローデ(ウエストフアロニア軍に将軍として勤務)のかわりにあなたが派遣されたら、否応なしにプロシヤ王の承諾を得られたにちがいないですよ。まったくお見事な弁舌ですな。お茶を頂きますか？

——ただ今、へそれはそれとしまして、——と彼女はまた落着きを取りもどしながら、言葉をついだ、——今日はわたくしどもへ、とても面白い方がお二人、お見えになりますのよ、へおひとり、モルテマール子爵といつて、ロハン家を通してモンモランシイ家とご親類筋の方で、フランスでも由緒あるお家柄です。この方は立派な、しかも本物の亡命者のお一人ですわ。それにヘモリオ僧正(おぼ)。この方の深いお知識はご存じでございますか？ 陛下にも拝謁

をお許されになりましたね。ご存じでいらつしやいますか？

——ほう！ それは大いにうれいすな、

——と公爵は言った。——ときにひとつ伺いたいのですが、——とさもふとなにかを思い出したようにことさらさりげなくつけ加えたが、じつはいまだずねかけていることが彼の訪問の主眼目であつたのである。——「皇太后」がフンケ男爵のウーノン一等書記官任命を希望しておられる、というのは本当でしょうか。へどうもあの男爵は取柄のない男らしいですがね。」

——ワシーリイ公爵は、皇太后マリヤ・フォードロワナを通して男爵に得させようとする運動の行われているその地位にわが息子を据えたいと思つていたのでした。

アンナ・パーヴロワナはほとんど眼を閉じてしまつた、それは、自分にせよだれにせよ、皇太后陛下の御意や思召しにかなつていられることをかれこれ言うことはできない、というしるしなのである。

——「フンケ男爵は姉宮殿下から国母陛下にご推薦された方でございます、——と彼女はしずんだ、すげない調子でそれだけ言つた。アンナが皇太后陛下の名を口にしたとき、彼女の顔は不意に忠誠と尊敬の深い、心からなる表情を示し、なお一抹の愁いさえこめられていたが、これは彼女の場合、話の最中に高貴な保護者のことに触れたときにならずあることだつた。彼女は皇太后陛下がフンケ男爵にへ多くの尊敬をお払いになつていられる由を告げた。そして

彼女の眼ざしはまたしても愁いに閉ざされた。

公爵は冷やかに黙つてしまつた。アンナ・パーヴロワナは彼女に独特な宮廷式の、女らしく、巧みな、しかもすばやい気転をきかせて、皇太后陛下に推薦されている人物にそのような取り沙汰をあえてした公爵をたしなめ、同時に慰めてやろうという気になつた。

——「へときにお宅さまのご家族のごことですけれど」——と彼女は言った、——「ご存じかもしませんが、お宅のお嬢さまは社交界にお出になつてから、へみんなの全体の喜びになつておしまひになりましたんですよ。まるで太陽のようにお美しいということですよ。」

公爵は敬意と感謝のしるしに一礼した。

——「わたくし、よくそう思うのですけれど、

——とアンナ・パーヴロワナは一瞬の沈黙のあとで、公爵のほうへ進みよつて、あたかもこれで政治や社交界の話は打切りしてこれからしんみりした話のはじまるのですとほのめかすように、やさしく彼にほほえみかけながら、言葉をつづけた、——「わたくし、よく考えるのですけれど、人生の幸福などというものは、どうですと不公平に分けられるものでございませうかね。どうしてお宅さまには運命がお二人もすばらしいお子さまをお授けになつたのでございませうね。(ご次男のアナトリーさんは別ですわ、わたたくしあの方は好きません、——彼女は眉をつり上げて、手きびしく断つた。)

——「あんなご立派なお子さんたちをね！ それで、あなたに、あなたに、一番お子さんたちを買つてい

らつしやらない、これこそ宝の持ちぐされというものでございますよ。

そして彼女はいつものうっとりしたような微笑でほほえんだ。

——「へでは、どうしろとおっしゃるのですか？ さしずめラファエル(マイヌの文学者で、人物)なら、自分には親の愛などというこぶはない、とでも言うところでしようがな」——と公爵は言った。

——「冗談はおやめあそばせ。わたくしにあなたとお話したいと思つておりますよ。ご承知のように、わたくしは、ご次男には不満をもつております。これはここだけのお話にして頂きたいのですが(彼女の顔は愁わしげな表情を帯びた)、あのお子のごことは皇太后さまのまわりでもおうわさが出て、あなたが気が毒だということ……」

公爵は返事をしなかつた、が、彼女のほうは黙つたまま意味ありげに彼をながめやりながら、返答を待つていた。ワシーリイ公爵は顔をしかめた。

——「で、わたしにどうしろとおっしゃるのですか？——とついに彼は言った、——「ご存じのとおり、わたしはあれたちの教育のためには父親としてなし得る限りのことをしてやりましたところ、がそろいもそろつて「へ出来そこない」になつてしまつたのです。イッポリーのほうは、まだそれでもおとなしい馬鹿ですが、アナトリーときたら——手がつけられないので、違ひつ

もより不自然に、いやに活気づいて笑いながら、しかも口のあたりに刻まれたしわのなかに、なにかしら意外に粗野で不快なものをとくに鋭くあらわしつづ、そう言った。

——またどうして、あなたのような方のごろにお子さんがお生まれになるのでしょうかね？ これであなたがお父さまでさえなければ、わたしにしてはもう一つ、あなたをおとがめでできませんでしょうよ、——とアンナ・パーヴロヴナは物思わしげに眼をあげながら言うのだった。

——へわたしはあなたの忠実な下僕です、だからへあなたにだけは打ち明けて申します。わたしの子供たちは——へわたしの生存の重荷なのです。これは、わたしの十字架です。わたしは自分ではそう観念しているのです。へどうしたらいいのでしょうか？……——彼は残酷な運命に自分が従順なところを身振りで表わしながら、黙っていた。

アンナ・パーヴロヴナも考え込んでしまった。——あなたはあの放蕩息子ほうたうしこさんのアナトリーを結婚させようなどとはついぞお考えにもならなかったでしょうね。俗に世間では、——と彼女は言った、——オールド・ミスほど人を結婚させたがる、などと申します。わたくしはまだこのひげ目は自分に感じてはおりませんが、ちようど、わたくしのほうに一人へ可愛い娘さんがあるのですからね、父親といっしょで、たいそう不幸な女なのです。へわたくしどもの親戚筋にあたるボルコンスキイ公爵令嬢なのですけれど。——ワシリーイ公爵は返事はしな

った、が社交界の人士に特有の想像と記憶の素早さでうなずいてみせ、この報告を一考することにしたことを示した。

——いや、ご存じもあるまいが、あのアナトリーには年に四万ルーブリかかりますのでね、——と彼は明らかにおのれの考えのみじめな流れを押しとどめかねた様子で言った。そしてちよつと口をつぐんだ。

——このままですら、五年後にはどうなるでしょう？へこれが父親たることの役得というものですかね。で、その女は財産家なのですか、その公爵令嬢とやらは？

——お父さまはたいした財産家で、しまりやですわ。いまは田舎住いいなかぢまいをしております。ほら、まだ先帝の時に退役になって、「プロシヤ王」と綿名あだなされたあの有名なボルコンスキイ公爵でございませよ。なかなか頭のきく人なのですけれど、妙に変わったところのある、つき合にくい人です。ですから令嬢はお氣の毒にも、石のように不仕合せなのです。この娘さんのお兄さんというのは、ほら、このあいだリーザ・マイネンと結婚した、クトゥーゾフ將軍の副官ですわ。この方も今日はお見えになるはずになっております。

——へあのね、アンネットさん、——と公爵はいきなり相手の手をとって、それをなぜか下のほうへ折り曲げながら言った、——へひとつこの話をまとめて下さらんか。そうすれば、わたしはあなたのこの上なく忠実な下僕しんぺいになります。もつともうちの領地管理人が報告

を書くときはいつも「ゴゴ」ですが。(正しくは「ゴゴ」だが、無学な百姓は発音で) その娘さんなら家柄も申し分ないし、財産家ですわね。わたしにとっては願ったりかなったりとすう次第です。

そして公爵は、このひと特有の自由な、親しみのある、優雅な身振りで女官の手をとって接吻し、それがすむと、安楽椅子にうちくつりいで、脇のほうをながめながら彼女の手を心もち振ってみせた。

——へお待ち下さいませよ、——とアンナ・パーヴロヴナは思案しながら言った、——わたくし今晚にもリーザさん(ボルコンスキイの若夫人)にお話ししてみませわ。もしかすると、まとまるかもしれません。へわたくしもひとつお宅のご家族の中にまじってオールド・ミスの仕事の勉強をはじめてみますわ。

=

アンナ・パーヴロヴナの客間は少しづつ客が寄りはじめた。年配や性格こそじつにまちまちだが、住む階層をひとしくするベテルブルグの上流社会の人々が乗りつけて来ていたのである。ワシリーイ公爵の娘で、美人のエレンも来たが、これは同道で公使の祝宴に臨むために父を迎いがてらに立ち寄ったものだった。彼女はシーフル(皇后の頭文字を組み合わせた飾り)をつけ、舞踏服を着ていた。へベテルブルグきつての魅力ある婦人」として知られている若い、小柄なボルコンスキイ公爵若夫人も来た。この夫人は去年の冬結婚して、今は妊娠中のため上流社会には出ないでいるの

だが、まだ小さな夜会ぐらいいは顔を見せていた。ワシーリイ公爵の息子のイッポリート公爵もモルテマール子爵といっしょにやって来てそれを紹介したし、モリオ僧正やその他大勢の客も乗りつけて来た。

——あなたはまだへわたくしの伯母^{おば}にお会いになったことはございませんでしたか？——とか——伯母とお知合いではございませんか？——とか、アンナ・パーヴロワナは来客たちこそう言つては、客たちがやがて来訪してきたころに次の部屋から高い蝶リボンをつけた姿で現われて来た小柄な老婦人のほうに彼らをひどくまじめくさつて連れてゆき、客からへわたくしの伯母のほうへゆるやかに眼を移しながら、客たちの名を告げ、そのまま脇へ去つて行つた。

客たちは、だれひとり知る者もなければ関心ももつていず、また用もないこの伯母さんなる者に対していずれも挨拶の礼を尽した。アンナ・パーヴロワナは打ちしずんだ、もつたいぶつた関心をこめて彼らの挨拶を眼で追いつつ、それを暗黙のうちには認じていた。へわたくしの伯母はだれにでも同じ文句で相手の健康と、自分の健康と、それから、幸い近頃すぐれていられる皇太后陛下の健康のことをしゃべる。このそばへ連れて来られた客は、さすがに儀礼上急ぐ気振りにこそ見せないが、重苦しい義務を果してほつとした気持になり、もう今夜は二度とふたたび彼女のそばなどへは近づきまいとして、いそいそと老婦人から離れて行くのだった。

若い公爵夫人ボルコンスカヤは金の刺繡をし

たビロードの袋に編物の仕事を入れてやつて来た。うぶ毛でかすかに黒ずんで見える彼女のかわいらしい上唇は歯にくらべて短かめだったが、かえつてそれが開き加減になっているところも愛らしかったし、時々それがのびて下唇にまで垂れると、なおいっそう愛らしかった。非常に魅力のある女性の場合はいつもあることだが、彼女のこの欠点——唇の短いことと口が半分開いていること——も特別な、独自の美しさのようには思われるのだった。身重の状態をいっこうに苦にもしないで、健康と活気にあふれたこの美しい、未来の母の姿を見ることはだれにとつても心たのしいものだった。老人たちや退屈して浮かぬ顔をした若い人々も、少し彼女といっしょにいて話をしていると、自分自身が彼女に似てくるような気がした。彼女と言葉を交わして、そのひとことひとことに明るいほほえみや輝くばかりの白い歯がたえずちらつくのを見た者は、自分は今日とはとくに愛想がいい、と思つた。しかも、だれもがめいめいにそう考えるのだった。

小柄な公爵夫人はよろめくようにしながら小刻みな、素早い足取りで、仕事袋を手にしたままで、テーブルをひと廻りした、そしてうれしげに身じまいを直しながら、銀のサモワールのそばのソファに腰をおろしたが、彼女のすべてのことはすべて自分にとつても、周囲のすべての人にとつてもへ慰みの一部であるかのようにだつた。

——へわたくしはお仕事をもつて参りました

のよ、——彼女は手提袋をひろげて、みんなのほうに向き直りながら、そう言つた。

——まあ、アンネット、へわるいご冗談をなさつちやいやよ、——と彼女は今度は女主人に向つて言つた、——へ今晚はほんのささやかな夜会ですなんて書いておよこしになるもんだから。見て下さいましよ、このなりを。

そして彼女は、胸のやや下のあたりを広いリボンでしばつた、レースすくめの優美な灰色の服を見せようとして両手をひろげた。

——へご心配はご無用ですわ、リーズ、あなたはいつだつて、一番おきれいですもの——とアンナ・パーヴロワナは答えた。

——へご存じでしょうか、宅の主人はわたしを捨ててゆこうとしておりますのよ——彼女はある將軍に向つて同じ調子でつづけた、——へ死に行こうとしておりますのよ。いったいなんのためにあんなにまわしい戦争なんかしなければならぬんでございませうね——彼女はワシーリイ公爵にそう言つたが、そのまま返事も待たずに今度は公爵の令嬢である美人のエレンのほうに向き直つた。

——へさても愛らしいおひとですな、この小柄な公爵夫人は！——とワシーリイ公爵は小声でアンナ・パーヴロワナにささやいた。

まもなく小柄な公爵夫人のあとから入つて来たのはどっしりと肥つた若者で、頭は刈上げにして、眼鏡をかけ、そのころ流行したうす色のズボンに高い襟をつけた、肉桂色の燕尾服を着込んでいた。この肥つた青年は今モスクワで危

篤の状態にあるエカテリーナ時代の頭官ベズーホフ伯爵の私生児だった。彼はまだどこにも動めてはいず、留学先の外国から帰ったばかりで、これが社交界への皮切りだった。アンナ・パーヴロヴナは彼女のサロンでもっとも低い階級の人々に応待する時の会釈で彼に挨拶した。しかし、自己流の品定めによって最低の挨拶はしたもの、入ってきたビエールの姿を見ると、アンナ・パーヴロヴナの顔には、あたかもなにか巨大な、場所柄に不相応なものを見かけた時にあらわれる表情に似た不安と恐怖の色が描き出された。たしかにビエールは部屋の中のほかの男たちよりは多少は大きかったことは事実だが、しかし、この恐怖は、この客間にいたすべての人々と彼とはっきり区別していたその利口そうな、同時におおずとした、観察するような、自然の眼ざしだけによるものらしかった。

——へまあ、ビエールさん、こんな哀れな病人をお見舞いに来てくださるなんて、たいそうご親切ですのね、——とアンナ・パーヴロヴナは彼を案内して連れて行った伯母とびっくりしたように眼を見交わしながら、彼に言った。ビエールはなにやらわけの分らぬことをつぶやいて、なおも眼で何かを探しつづけていた。彼は小柄な公爵夫人に対しては、近しい知人のように頭をさげながら喜ばしげに、明るくにっこりほほえんだ、そして伯母さんのほうへ進んで行った。アンナ・パーヴロヴナの怖れもけつして無意味ではなかった、というのもビエールは皇太后の健康についての伯母さんの話をしまいま

で聞かないうちに彼女から離れてしまったからだ。アンナ・パーヴロヴナはびっくりして声をかけて彼をとどめた——

——あなたはモリオ僧正はご存じじゃありませんかしら？ とても面白い方ですわ……——と彼女は言った。

——ええ、ぼくもあのひとの永久平和策というのを聞きましたよ、とても面白いんですが、実現はちよつとむずかしいでしょうね……

——そうお思ひになりました？……アンナ・パーヴロヴナはそう言ったが、これはなにか口うらだけを合わせておいて、また当家の女主人としての自分のつとめにつこうとするためだった。ところがビエールはさっきとは反対の非礼を犯してしまった。さっきは彼は相手の言葉をしまいまで聞かずに去ってしまったのだが、今度は自分から離れる必要のある相手を自分のほうからの話でひきとめてしまったのである。彼は首をまげ、大きな両足をふん張って、なぜ自分が僧正の計画を妄想と考えるか、という理由をアンナ・パーヴロヴナに証明しはじめた。

——そのお話ならまた後ほどいたしましょうね——アンナ・パーヴロヴナは笑いながらそう言った。

そして、生きる術うというものを知らぬ若者から解放されると、彼女は当家の女主人としての自分の仕事に立ちもどり、座談の消えかかったところへはどこへでも応援に出る覚悟で、なおも耳をすまし、あちあたりを見廻しつづけていた。それはちよつと紡績工場の工場主が職場に職工

たちを据え、場内を歩き廻っているのに似ていた。機械が動かなくなったり、車軸の聞ききれない、きしめるような、大きすぎる音に気がつくると、主人はあわててやってくる、機械をとめたり、尋常な速度に調節したりする、——それと同じく、アンナ・パーヴロヴナも、自分の客間を歩き廻っては、話の立ち消えになつた、あるいは逆にはずみすぎた仲間へ近づいて、ひとこと言葉をさしはさむか、席を入れかえるかして、ふたたび、正常にかえつた、礼儀正しい会話の機械を運転しはじめのだった。だが、そうした配慮のあいだじゅうもビエールに対する特別な恐怖はたえず彼女のうちにあらわれていた。彼女は彼がモルテマールのまわりで交わされている話を聴きに近づいて、さらに僧正がしゃべっている別の仲間のほうへ去つた時には、心配そうにそのあとを眼で追っていた。外国で教育を受けていたビエールにとっては、アンナ・パーヴロヴナ家のこの夜会はロシアで見るとはじめてのものだった。ここにはペテルブルグの全知識階級が集っていることは彼も知っていたので、その眼は、ちよつと玩具屋の店に入った子供のようになきよるきよるしていた。彼はせっかく耳にできる聡明な会話を聞きもらしはしないかと始終おそれていた。ここに集つた人々の自信たつぷりな、優雅な顔の表情に見入りながら、彼はたえずなにかとく賢明な話を期待していた。最後に彼はモリオ僧正のほうに近寄つた。座談が面白そうだったからである、そして若い人たちによくあるように、彼も自分の考えを披露す

る機会を待ちつつ、そこに足をとめた。

三

アンナ・パーヴロヴナの夜会は今や活動を始めたところだった。車軸はいたるところで正常に、よどみなく騒音をたてていた。《伯母さん》と、そのそばにもう一人、この晴れの座にはちよつと似つかわしくない、泣きはらしたような、瘦せ顔の中年の婦人がすわっているのを除いて、一座は三つの仲間に分れていた。第一の、男性の多い組では僧正が中心となり、第二の、青年たちの組には——ワシリーイ公爵の娘である美人の令嬢エレンと、あでやかで血色もよく、若いわりに少し肥りすぎた若い公爵夫人ポルコンスカヤがまじっていた。第三の組には——モルテマール子爵とアンナ・パーヴロヴナがいた。子爵は顔立も愛らしく、物腰の柔らかな青年で、明らかに自分を名士と自認している様子だったが、育ちがいいので、けっこうはたの連中におとなしく利用されていた。アンナ・パーヴロヴナもどうやら彼を来客たちのサーヴィイスに使う気でいるらしかった。すぐれた給仕頭が、きたならしい料理場で見たらとても口に入れる気にもなれないような牛肉の一片をも、超自然的な珍味として客膳にそなえるように、この夜会でもアンナ・パーヴロヴナはまず子爵を、次には僧正を超自然的に洗練されたものとして来客たちにすすめるのだった。モルテマール子爵のグループではアンギヤン公（七二—一八〇四、レオンに逮捕され処刑された。ナポレオンが、ナポレオンが、ボナパルトのために捏造した事件として有名）の殺害が

さっそく話題に上った。子爵は、アンギヤン公はおのれの義侠心から死んだので、ボナパルトが怒ったのには特別な原因があったのだ、と言った。

——へまあ！ そうでしたの。それをぜひ伺わせて頂きたいものですわ、子爵！——とアンナ・パーヴロヴナは言った。なにかこの文句にルイ十五世時代のひびきがあるように感じられるのが彼女にはうれしかった、——へぜひ伺わせて頂きたいものでございますわ、子爵。

子爵は承諾のしるしに頭をさげ、うやうやしくにこりとした。アンナ・パーヴロヴナは子爵のまわりにひと組こしらえて、一同にその話を聞くようにと誘いかけた。

——子爵は公と直接のお知合いだったのでございますよ、——とアンナ・パーヴロヴナは客の一人にささやいた、——子爵はそれはお話のお上手な方でして、——と彼女はまた別の一人に言った、——へやはりお生れのいいところはひと目で分りますわね——と第三の客には言った。こうして子爵は熱い皿にのせて青いものをふりかけたロースト・ビーフのように、じつに晴れがましい、自分にとっても損にはならぬ光に包まれて、一同に提供されたわけだった。

子爵は早くも話をきり出そうとして、デリケートな笑いを見せた。

——こちらへいらっしゃいませよ、へエレンさん——別のグループの中心になって少しはなれたところにすわっていた美人の公爵令嬢に

向ってアンナ・パーヴロヴナは言った。

公爵令嬢エレンはこやかにほほえんでいた。そしてこの客間へ入って来たときの笑顔と少しもちがわぬ、まったく美しい婦人の笑顔のままで立ち上った。常春藤と苔で飾りつけたまっ白な舞踏服の衣ずれの音も軽やかに、肩の白さ、髪やダイヤモンドの輝きに人目を奪いながら、道をあける男たちのあいだを分けて、まっすぐに進んで来た。別にだれを見やるでもなく、しかも居並ぶ人々に一様にほほえみかけながら、まるで自分の肢体や、豊かな肩や、そのころの流行で思いきりあけひろげた胸や背中の美しさを存分に堪能する権利をだれにでも心よく与えるかのように、また舞踏会の晴れの光輝を一身に担うかのように、アンナ・パーヴロヴナのほうへ近づいて来た。彼女には媚態などというものは毛筋ほども認められなかったばかりか、むしろ反対に見る者の心を征服するような、あまにも強烈な、疑う余地のないおのれの美貌に気がとがめているらしいほど、それほど美しくかった。

——へなんと美しい女だろう！——と彼女を見た者はだれしもそう言うのだった。子爵は彼女が自分の前に腰をおろして、同じく変らぬ微笑で自分を照らしたとき、なにか異様なものに驚かされたように両肩をすくめて、眼を伏せた。

——へマダム、どうもこういう聴き手の前に立たされたのは、自分の技術が心もとなくなりますよ——彼はにっこり笑って首をかしげなが

ら言った。

公爵令嬢はあらゆる、豊かな片腕でテーブルにひじをついたまま、べつに何か言う必要もなっていないと思つてた。彼女は、微笑を浮かべて、待っていた。話のあいだじゅうも、テーブルの上に軽くのせられて自分の肉づきのいい美しい腕やそれよりなお美しい胸元を時たまながめやっては、そこにかけてダイヤモンドの首飾りを直したりしながら、きちんとすわつていた。幾度かは服のひだも直した、そして、話が一座に感銘を与えるようになってくると、アンナ・パウロワナのほうを振り向いて、この女官の顔に浮かんだのと同じ表情を自分もとり、そこで輝く微笑を見せてふたたび安心するのだった。エレンのあとからは、例の小柄な公爵夫人も茶卓から移つて来た。

——へちよつとお待ちになつて、わたくし、仕事をとつて参りますから、——と彼女は言つた、——へあなた、なにを考へこんでいらつしやるの？——とIPPポリート公爵のほうを向いて——へわたくしの手提げをもつて来て下さい。

公爵夫人はここにこして、みんなと話を交わしながら、ふいに席を変えて、腰をおろすと、うれしそうに身じまいを直した。

——さあこれでもういいわ、——彼女はそう言つと、話を始めてもらうように頼んで、自分IPPポリート公爵は彼女に手提げをわたして、彼女につづいて席を立ち、安楽椅子をそのほう

に引きよせて、そばにすわつた。

へ愛すべきIPPポリートは美女の妹と並はずれて似ていることで人をおどろかしたが、もつとおどろくべきことは、それほど似ていながら彼のほうがひどく醜男なことだった。顔かたちと妹とそっくりなのだが、彼女のほうは常に陽気な、満ち足りた、若々しい、いつも変らぬ微笑とまれば見る古風な肢体の美しさに輝いていたのに、兄のほうはそれに反して、同じその顔立が白痴のもやに包まれて、いつもぬぼれきつた気むすかしさを表わし、体つきも瘦せぎすで、弱々しかった。眼、鼻、口——すべてが一つの捉えがたい、退屈な波面に圧縮されているように、手足も常に不自然な位置におかれていた。

——へこれは幽霊の話じゃないんですか？——と彼は公爵夫人のそばに腰をおろすと、まるでそれが無いと自分は話が始められないともいふふうにあわてて枝付眼鏡を眼にあてて言つた。

——へとんでもない——とびっくりした話し手は両肩をすくめながら答えた。

——へというの、ぼくはどうも幽霊の話と——公爵はそう言つたが、その調子は、どうやら自分でもその言葉を言つてしまつてから、あとでやつとその意味が分つた、といつたふうだった。彼がそれを口にした時の思ひ上つた様子のために、果してその言葉が非常に気のきいたものだったか、それとも大いに下らないものだったかは、だれにも理解がいかなかった。彼は濃い

緑色の燕尾服に、自らの言葉をかりればへおびえた水精の腿の色のしたズボン、それに長靴下、短靴というなりだった。

へ子爵は当時ひろまつていた次の逸話をいとも懇切に話した。それは、アンギヤン公はジョルジュ嬢とあいきするのためにひそかにパリへやつて来たところが、そこで、これもこの有名な女優の愛を受けていたボナバルトと鉢合せしてしまつた、そして公と顔を合ませたあと、ナポレオンはたまたま持病の癩癩で倒れ、その生死は公の権限のなかに握られることになつた、公はその権限を利用して仕方なかった、しかるにボナバルトは後に公のこの義侠心に対して死をもつて報いた、というのである。

話したいそう実がいつて面白かつた、ことに恋仇同士が突如互に相手をそれと見分けるあたりがよかつた、婦人たちも興奮したらしかつた。

——へすてきですわね、——とアンナ・パウロワナは小柄な公爵夫人のほうを問いかけるように振り返りながら言つた。

——へすてきですわ、——と小柄な公爵夫人もささやいて、針を手仕事のなかに突きさした。まるで話の面白さと魅力が仕事をつづける邪魔になるようなふうだった。

子爵はこの沈黙の讃辭を認めた、そしてありがたくにこりと笑つと、さらにつづけた。しかしこのとき、自分にとつて恐ろしい若者のほうをすつと見守つていたアンナ・パウロワナは、彼が僧正を相手になやらあまりにも熱狂して

大声で話しているのを認めたので、その危地の救援に急いで出かけていった。実際、ピエールは僧正を相手にして政治的均衡についての話を首尾よくはじめたところだった、僧正のほうでも青年の素朴な熱心さにたしかに興味をおぼえたらしく、彼を前にして、自分の得意の考えを展開していた。二人とも大いに活気づいて、自然と耳を傾けたり、話したりしていた、そしてこのことがアンナ・パーヴロヴナには気に入らなかつたのである。

——手段は——ヨーロッパの均衡とそれ（国際法）があります、——と僧正は言った、

——だからロシアのような野蛮をもって鳴る実力国が私欲を離れて、ヨーロッパの均衡を目的とする同盟の頭に立ちさえすればよいのです、——そうすればこの国は世界を救えるのです！

——ですが、そういう均衡をどうやって発見なさるのです？——とピエールは言いかけた、
 が、このとき、アンナ・パーヴロヴナがかたわらへやって来て、きびしくピエールを見据えてから、イタリアの僧に向つて、この気候をどんなふうにしてのいでいるか、とたずねた。
 イタリア人の顔色は急に變つて、相手を小馬鹿にしたような、とつてつたような、甘つたるい表情を帯びたが、これは、どうやら婦人と話すときの彼のいつもの癖であるらしかった。

——わたしは社交界の、ことにこうしてご招待をかたじけなくして頂いていますご婦人方のお仲間の知性と教養の魅力にすっかりうっとりとしてしまつていきますので、とても気候のこと

までは考え及びませんでしたよ——と彼は言つた。

こうなつてはもはや僧正をも、ピエールをもはなせない、アンナ・パーヴロヴナは監視に便利なようにこの二人をみんなといっしょのグループへ入れてしまつた。

このとき客間へは新顔が入つて来た。その新顔というのはアンドレイ・ボルコンスキイ若公爵で、例の小柄な公爵夫人の夫だった。ボルコンスキイ公爵は背は高くないが、水際立つた美青年で、顔立ははつきりとした、乾いた感じだった。彼のからだつき全体は、疲れて退屈しきつた眼ざしから物静かな、きちんとした足取りにいたるまで、小柄ながらびちびちした妻とはおよそ著しい対照をなしていた。どうやら彼にとつてはこの客間にいるすべての人々は顔馴染であるばかりか、彼らを見るのも聞くのも退屈でたまらないほど嫌気がさしていらしなかつた。そのうんざりした一同の顔の中でも美しい妻の顔はとりわけ彼には鼻についていたようだった。そして、せつかくの美貌をそむけた。彼はアンナ・パーヴロヴナの手に接吻すると、眼を細くして居並ぶ一座を見わたした。

にしたたいとおっしゃいますので……
 ——へで、奥さまのリーズさんは？
 ——あれは田舎へやります。
 ——あんなお美しい奥さまをわたくしたちから取り上げるなんて、それは罪じゃございませんこと？
 ——（へアンドレ）——と彼の妻はほかの人たちに対するのと同じく媚びるような調子で夫に呼びかけた、——子爵がいまジョルジュ嬢とポナルトのとても面白いお話をして下さいましたのよ！
 ——アンドレイ公爵は眼を細くして脇を向いた。アンドレイ公爵が客間に入つて来たときから喜ばしい、親しげな眼を彼から離さずにいたピエールはこの時彼に近づいて来て、その手をとつた。アンドレイ公爵は振り向きもせず、眉をひそめて、自分の手にさわつた者に対するいまいましさを表わしたしびい顔をしてみせた、が、ピエールのにこにこした顔に気づくと、自分でも思ひがけない善良な、気持のいい微笑を浮かべた。

——へあなたは戦争にお出かけになりますんですって、公爵？——とアンナ・パーヴロヴナは言つた。
 ——（ヘクトウゾフ將軍が）——とボルコンスキイはフランス人並みに語尾のゾフにアクセントをつけて言つた、——へわたくしを副官

——なんだ、君か！……君も社交界へ出て来たんだね！——と彼はピエールに向つて言つた。
 ——あなたが見えることを知っていたからですよ、——とピエールは答えた。——お宅へは夜食をしに上りますよ、——と彼は、まだ話をつづけている子爵の邪魔にならぬように小声でつけ加えた、——いいでしょうね？
 ——いや、それはこまる、——アンドレイ公爵は笑いながらそう言つたが、相手の手を握り

しめて、いまさら、そんなことをきく必要があるものか、という意味を通わせた。彼はまだなにか言おうとしたが、このときワシーリーイ公爵が娘といっしょに立ち上ったので、二人の青年も道をあけるために席を立った。

——どうも申訳ありませんな、子爵——とワシーリーイ公爵はフランス人にそう言って、わざわざ立たないでくれというように相手の袖口を椅子のほうへやさしくひっぱり下げた。——おいにくの公使の祝宴で、せっかくの楽しみはふいなるし、お話の腰を折ることになってしまいました。こんなうっとりするような夜会を見捨てなければならぬとは、がっかりですよ——彼はアンナ・パーヴロヴナに向かって言った。

公爵の令嬢エレンは服のひだを軽くつまんで椅子のあいだを進んで行った。そのあでやかな顔にはいつそう明るく微笑が輝いていた。ピエールはまるで度胆を抜かれたような、感きわまつた眼つきで、この美女がそばを通るときに彼女をながめやうとした。

——すばらしくきれいだな、——とアンドレイ公爵が言った。

——すばらしいですね、——とピエールも言通らずがりにワシーリーイ公爵はピエールの手をとって、アンナ・パーヴロヴナに向かって言った。

——ひとつ、この熊さんの教育をお頼みしますよ、もうひと月もわたしの家にいるのですが、社交界で見かけるのは今日がはじめてなのです。

聡明なご婦人方のお仲間ほど若い者にとつて大切なものはありませんからな。

四

アンナ・パーヴロヴナはにつこり笑って、ピエールの世話を約束した。彼が父親のほうのつながりでワシーリーイ公爵の親戚筋にあたることを承知していたからである。先刻へわたしの伯母さんといっしょにすわっていた中年の婦人はあわてて立ち上って、玄関でワシーリーイ公爵に追いついた。彼女の顔からは今までのわざとらしい興味の表情はすっかり消えてしまっていた。人の好い、泣きべそをかけたようなその顔の表わしていたものはただ不安と恐怖だけだった。

——公爵、うちのボーリスのことはどうして頂けますでしょうか？——と彼女は玄関で彼に追いつきながら、言った（彼女はボーリスという名をとくにボーリスと発音した）。——わたくしはもうこれ以上、ペテルブルグにとどまってははいられないのでございます。うちのあの可哀そうな子にわたたくしはどんな知らせを持っていつてやれますのか、お聞かせ下さいませ。

ワシーリーイ公爵はしぶしぶ、ほとんど無礼に近い態度でこの中年の婦人に耳をかし、じれったい様子さえ見せているのに、彼女のほうはやさしく、相手を感動させるように彼にほほえみかけて、逃げられぬようにその手をとった。

——ひとこと陛下におっしゃって下さりさえすればよろしいのでございます。そうすればあ

の子はもういきなり近衛へまわして頂けますのですから——と彼女は頼むのだった。

——大丈夫、わたしは出来るだけのことはすべてしますから、公爵夫人、——とワシーリーイ公爵は答えた、——だが、陛下へお願いするのは、わたしではむずかしいでしょうな。それよりも、ゴリーツィン公爵を通じてルミャンツェフにお頼みになったらいかがですか。このほうが賢明ですよ。

この中年の婦人はドルベツカヤ公爵夫人とあって、ロシアでも由緒ある家柄の一つだったが、今では落ちぶれて、とうに社交界からもぬけてしまい、むかしのひきもなくなってしまうていた。彼女が今度上京して来たのは、一人息子を近衛に入れる奔走をするためだった。そしてただひたすらにワシーリーイ公爵に面会したいばかりに、自分からアンナ・パーヴロヴナの夜会に押しかけて来たり、子爵の話の聞いたりしていたのだった。が、このワシーリーイ公爵の言葉には、はつとさせられた。かつては美しかったその顔は怒りの色を表わした。が、それはほんの一瞬しかつづかなかつた。彼女はふたたびにつこり笑って、ワシーリーイ公爵の手を前よりもきつく握りしめた。

——どうかお聞き下さいませ、公爵、——と彼女は言った、——わたたくしはこれまで一度もご無心をいたしましたことはいけません、これからもけつしていたしません、またわたたくしの父とあなたとの仲を口にいたしましたことも一度だつてございません。けれども、今だけは、わたたく